

岩崎卓也先生のご逝去を悼む

常木 晃

Obituary for Professor Takuya Iwasaki (1929-2018)

Akira TSUNEKI

日本西アジア考古学会第2代会長を務められた岩崎卓也先生は、ご病氣療養中のところ、2018年2月4日午前10時50分にご逝去されました。

岩崎卓也先生は、1929年7月9日、中国東北区熊岳城でお生まれになりました。中国天津市日本人小学校、大連市南山国民学校を卒業された後、大連市大連中学校に入学され第3学年修了後、日本に戻られて1945年4月に海軍経理学校予科に入学、同年8月の終戦まで同予科で過ごされています。翌年長野県野沢中学校に編入され、さらに長野県立長野北高等学校に転入されて卒業し、1949年7月に新制の東京教育大学文学部に入学されます。1954年3月に同史学科日本史学専攻を卒業され、同年4月に明治大学大学院文学研究科に入学、同時に東京教育大学文学部の教務補佐員にもなられています。1955年3月に明治大学の大学院を中退され、その後は東京教育大学文学部教務員、同助手を務められ、1975年に助教授となりました。東京教育大学の筑波移転に伴い、1977年からは筑波大学歴史・人類学系助教授を併任され、1984年9月から筑波大学歴史・人類学系教授、1993年3月に同大学を定年退官され、同4月から2000年3月まで、東京家政学院大学人文学部教授を務められました。その間とその後、松戸市立博物館館長や、古代オリエント博物館館長などを務められています。また本務の傍ら、日本学術会議会員や、日本考古学協会会長、日本西アジア考古学会会長、長野県をはじめ多くの自治体の文化財審議委員など、数々の公職を務めておられます。

岩崎卓也先生が考古学を目指されたのは、敗戦という大きな歴史の節目を経験されたことにあります。太平洋戦争時に愛国少年だった先生は海軍経理学校に入ったのですが、敗戦によってそれまでの日本の始まりが神々の栄光の歴史から縄文時代に突然置き換わってしまったことに、強い衝撃を受けられたのです。そして、国とは何か、国家とは何かを真剣に考え、考古学を学ぶ決心をされたと話してくださいました。国家や権力なんて目に見えず当てにならないことを、即物的な考古学を武器に自分の目で確かめる。そして自由に議論する。考古学から、国家の形成や権力の発生を探究するという研究テーマをライフワークとさ

れたのです。

岩崎先生は、専ら日本列島の国家形成期に当たる古墳時代研究に没頭され、「古式土師器考」(『考古学雑誌』48巻3号)や「古墳と地域社会」(『日本考古学を学ぶ』3)など現在でも引用される数多くの論文を執筆されています。特に古墳の消長と分布から地域政権の出現と変異を考察するという研究法の導入は、そのあとに続いた多くの研究者に強い影響を与えております。

岩崎先生は、アカデミックなことだけに目を向けられたのではなく、学問と社会の関係にも常に関心を持たれていました。学園紛争の激しい嵐が吹き荒れた1960年代末、岩崎先生が書かれた「考古学研究の現状と問題点—研究者の社会的責任をめぐって—」(『史学研究』76号)は、先生の強い思いが詰まった論文でした。学生たちの提起した何のための学問なのかという問題から、考古学の研究者も決して目をそむけてはならない、権威や権力にも自由にも



ボスラ遺跡で円形劇場を見上げる岩崎先生 (1990年)

の言えなければならぬと、先生は強く主張されておられます。

岩崎卓也先生が助手として勤務されていた東京教育大学文学部史学科史学方法論教室に増田精一先生が東京国立博物館から転入してこられてから、岩崎先生と西アジアの関係が深まります。増田先生とともに、1971年からイランのタペ・サンギ・チャハマック (Tappeh Sang-e Chakhmaq) 遺跡調査を開始され、また1974年からはシリアのユーフラテス河中流域での水没遺跡の調査に毎年出かけられるようになりました。タペ・サンギ・チャハマック遺跡の調査では、西アジアに出現した農耕文化が中央アジアへいつどのように伝播していくのかという問題に関心を持たれています (“Tappeh Sang-e Chakhmaq: Investigations of a Neolithic Site in Northeastern Iran.” In *The Neolithisation of Iran: The Formation of New Societies.*)。ユーフラテス河での水没遺跡の調査では、主に青銅器時代の集落や墓に関心を注がれました (*Excavations at Tell Ali al-Hajj, Rumeilah: A Bronze-Iron Age Settlement on Syrian Euphrates*. *Memoires of the Ancient Orient Museum* 4)。そして先生が隊長となられて、1990年から92年まで、シリア北西部のエル・ルージュ盆地の総合調査が実施されます (*Archaeology of the Rouj Basin: A Regional Study of the Transition from Village to City in Northwest Syria, Vol. I*. University of Tsukuba, *Studies for West Asian Archaeology* 2)。この調査では、日本で先生が行われた千曲川流域や筑波山麓の地域総合調査の手法を発展的に用い、詳細な編年構築に立脚して、テル型遺跡の消長と分布、さらに自然環境の変遷を考察し、地域における農耕の始まりから都市的集落の発達までを復元していくという、画期的な総合調査となっています。特に一つの完結した盆地のように見えるエル・



テル・エル・ケルク遺跡で人骨を取り上げる岩崎先生 (1997年)

ルージュ盆地も、古環境を復元してみると中央に湖が広がる時期が長く、新石器時代や青銅器時代には湖によって盆地内がいくつかの政治経済的集団に分断されていた状況を描き出したのは、注目すべき成果と言えましょう。その後も同じシリア北西部にある、テル・マストゥーマ (Tell Mastuma) 遺跡やテル・エル・ケルク (Tell el-Kerkh) 遺跡の発掘調査に参加されておられます。

西アジア・シリアの発掘現場の朝はとても早いのですが、隊長の岩崎先生は毎日誰よりも早く起き、お茶を沸かして私たちが起きだすのを待っておられました。それから出かけた発掘現場で、思うように働かず、自分の興味ある事ばかりに夢中になってしまうような学生にも、目を細めておられました。いつも優しい穏やかなまなざしで、学生たちの研究を静かに見守っておられたのです。この岩崎卓也先生のお人柄は、まさにおごらず、怒らず、惜しまずということに尽きるかと思います。岩崎先生が威張ったり、他人を激しく叱責するような場面に遭遇した方は、おそらくどなたもおられないでしょう。岩崎先生は決して派手なお方ではなく、いつも裏方として骨身を削って研究室や学会を支えてこられたことは、みんながよく知っています。先生が目指された考古学、そしてそのために創ってこられた研究室や学会の自由な雰囲気は、現在のようにやや閉塞感のある日本社会の中において、本当に貴重な空間と時間であったと改めて気づかされます。

岩崎卓也先生、長い間ご指導いただき本当にありがとうございました。そしてどうぞ安らかにお眠りください。

常木 晃
筑波大学人文社会系
Akira TSUNEKI

Faculty of Humanities and Social Sciences,
University of Tsukuba



ルージュ盆地の調査にて、宿舎で遺物整理をされる岩崎先生 (1992年)